

F 3 家庭科教育における技術と生活との関連について
岡山大教育 深田貞子 甲子園短大 O福知栄子

目的 家庭科教育では、小、中、高校を通して実践的・体験的学習の一貫性ととも、生活への還元が強調されている。家庭科の学習を最も長く継続した者の生活を通して、修得技術の維持および展開の状態を知ろうとするものである。

方法 教員養成学部、家庭科卒業生148名を対象にして、昭和56年6〜7月にかけて卒業後の生活環境の変化についての記入調査を行った。在学生の生活に生かしたいとする技術と活用の状態をも調査した。

結果 1) 学生は、衣、食の生活で手づくり志向が強く、調理、裁縫、手芸などに対する技術が生活に活用されることを求めている。 2) 現在、学生の自己の健康状態に対する認識は一応高い傾向がみられるが、健康度は必ずしも高くない。 3) 学生およびその家庭での住生活に関連する仕事としての技術では、衣、食生活における手づくり志向ほど高くなく、現実、企業依頼あるいはそれらの仕事の必要性を伴わない生活状態であることがみられる。 4) 教師として学んだ技術は、生活の中の技術としては必ずしも活かされていないが、年齢的には多少の開きがみられる。 5) 個人または家族の健康に関わるものとして、食生活を第一にあげ、それにまつわる家庭内生産は有職、無職の間ではその特徴はみられない。しかし、年齢的には差が認められる。 6) 社会的活動への参加には、職を有するものでは年齢的に違いのあることがみられる。一方、近所づきあいなどでは、有職と無職とも同じ傾向がみられた。